

# モード Mode Mode は語る

中野 香織

## 他人の接近阻む服

今年の春夏モードのトレンドは、「ビッグシルエット」であった。過去形にしたのは、コロナ禍にあって世界中の多くのアパレル関連店舗が営業休止を余儀なくされ、消費者も不要不急の外出自粛を要請されているのでモードの出番もほぼなくなっているためである。

しかし、半年前に発表されたモードを現在の目で概観すると、今まさしく必要とされる感覚がそこに表現されていることに気づく。

19世紀に逆戻りしたかのようなバレンシアガの大きなスカート、フリルを多用して身体の幅を広げるマー

## ビッグシルエットの効用

ク・ジェイコブスの服をはじめ、巨大な帽子や膨らんだ袖など。着る人に近づこうとしても服が接近を阻む。大きなシルエットは人との社会的距離を保つために貢献する「ソーシャル・ディスタンシング・ルック」なのであった。

1850年ごろのクリノリンスカートの風刺画



バレンシアガのスカートはクリノリンという19世紀の巨大フープ・スカートを連想させるが、思えば、クリノリンは社会的距離を保つための装いでもあった。男性が腰に手をまわしたくてもスカートが邪魔して届かない。距離を置き、貞節を表現する装いではあるが、拒絶しながら誘う誘惑装置でもあった。

膨張スカートの流行が消えた20世紀初頭にも社会的距離を保つ工夫は続いた。大きな帽子である。「マイ・フェア・レディ」

のオードリー・ヘプバーンの帽子といえどイメージを思い浮かべていただけだろうか。ある階級の人々は、装いにより社会的距離を置くことで神秘性を保ち、品位を守ろうとしたのだろう。

2020年春夏の私たちは、命を守るために社会的距離をとる。日傘をさしはじめた人もいる。傘の範囲内には入れない。海外では着ぐるみを着たり、キャラクターの被り物をしたたりして「変な人」と見られることで距離を保つ工夫も見られる。

ビッグシルエットをソーシャル・ディスタンシング・ルックという視点をもって見直すと、まさに今だからこそ着るべき服が提案されているようにも見えてくる。お蔵入りにするのは惜しい。(服飾史家)